

目的 本研究は、南部利英氏から盛岡市に寄贈された、南部家伝来衣裳(江戸初期の物も含む貴重な資料)を、現時点において実物調査し、記録にとどめておこうとするものである。先に本学会において、陣羽織の報告をしたが、今回は御護着として寄贈された、鎖帷子と、亀甲革繫御護着の二領について報告する。

方法 上記二領の形状、法量、材質、構成技法等について、実物精査を行なった。内部の鎖の状態、亀甲型革の繫ぎ方については、レントゲン撮影によって、その構造を明らかにし、併せて重量の測定も行なった。

結果 鎖帷子は、着用のおとがみられないほど、生地 of 損傷も褪色もなく、立派なものである。筒袖の短衣で、表は紺ラシャ、裏は浅葱麻で中に鎖が網状に入り、まわりを梁革で縁取りしてある。鎖の要所を亀甲型の金属板でおさえ、表から白糸でまわりをとじてあり、紺とのコントラストが美しい。重量は5.5 kgである。

亀甲革繫御護着は、衿に多少の汚れと、ほころびがあるが、生地 of 損傷はない。船底袖風の単衣で、表は金茶色の縞子、裏は同色の羽二重で、亀甲型の厚い革(1辺1.2cm)を白木綿にとじ、さらに真綿で包んで綿入れ風に仕立ててある。レントゲン撮影で要所に鎖が入っていることがわかった。

いずれも細めに出来ているのは、鎖下あるいは衣の下に着用したためであろう。